

[生活]

子どもと動物が深いかかわりを持ち、主体的に学ぶ姿を目指して

- 中型動物の飼育活動における場の設定・活動の工夫・継続性に着目して -

荒川 紀子*

1 はじめに

平成10年に学習指導要領が改訂された。生活科では児童が身近な人や社会、自然と直接かかわる活動や体験の重視、直接かかわる活動や体験の中で生まれる知的な気づきを大切にしている指導、各学校での創意工夫のある教育活動が改訂の基本方針として打ち出された。しかし、「ゆとり教育」の見直しが迫られている今日、生活科や総合的な学習の時間のあり方も問われ、生活科の存在意義が論じられている。そのような中で、人間をトータルに理解するための学力観が必要であり、「全人的な学力観」¹⁾のもと、生活科や総合的な学習の時間の必要性も指摘されている。子どもたちの生活体験の不足が言われている今日では、諸感覚を働かせ、具体的な活動や体験を通して得る学びは人間形成の上で大切なことであると考ええる。

これまでの生活科では動植物が生命をもっていることや生長することに気づき、それらを大切にしている態度を育むために、動物の飼育が盛んに行われている報告が数多い。動物飼育を通して、子どもたちは、自然や生命を尊重することを学ぶことはもちろん、地域や人々とのかかわりの大切さを感じることができる。このように動物飼育は、生活科の学習内容の項目それぞれを関連させた学習を行うことができる。それは、全人的な学力観を前提とした「生きる力」を形成する一翼を担っていると考ええる。

動物飼育に関しては、小型動物は飼育しやすいが、中型・大型動物の飼育は、飼育や飼育環境の設定が困難な分、動物の気持ちを考えた行動がとれるよさがあるという特徴が報告されている²⁾。中型動物の飼育に関しては、先行研究から、評価の工夫や単元のシリーズ化、他教科との関連などが試みられており、日常の世話から発展した活動が行われている³⁾。また、上越市立高志小学校の動物飼育における「評価規準」⁴⁾によると「初級：動物に自分のしたいことをする、中級：動物のことを考え自分のできることをする、上級：動物のしたいことに合わせ自分のことをきめる」とあり、そこには、継続した活動の中で初期段階の学びをたっぷりと経験することで中級へと成長するようになる、とある。

以上のように中型動物の飼育に関しては年間の活動計画を工夫し、継続的な飼育を行うなどの実践は報告されている。一方で子どもたちの学びの変容を具体的な視点のもとに考察している研究報告は数少ない。嶋野⁵⁾は子どもたちにおける「活動との出会い」「方向のとらえ」「活動の繰り返し」「価値あることの実現」の4項目を立て、生活科における「豊かな学習活動」について考察している。また、木村⁶⁾は、生活科での具体的な支援の手立てとして、「場の設定」(物的なものとの人的なもの)と子どもの行動に対する教師が育てたい力への「方向付け」をする支援が大切であると述べている。子どもが自分にとって価値ある学習活動の方向を自分で見つけ出そうとする「方向のとらえ」と教師が子どもに対する「方向付け」が一致するような「活動の工夫」が必要であると考ええる。

筆者は上記のような先行実践や報告等をふまえ、また筆者自身の過去の実践の反省をも考慮し^{註1)}、「場の設定」「活動の工夫」「継続性」の3つの視点に重点をおくことで、子どもの主体的に学ぶ姿が育まれるのではないかと考えた。子どもと対象とのより深いかかわりがもてるように、継続的な飼育活動に加え、学校の特色を生かし、子どもと動物との関係だけでなく、地域や人々、他の単元や教科との関連をもたせることにした。

そこで本研究においては、先行研究ののっとり、以下の視点に重点をおき、動物飼育活動を試みた。

- | |
|---|
| (1) 出合いやかかわり合いを密にするような場の設定
(2) 子どもたちの話し合いを重視し、子どもの願いや思いを具現化する活動の工夫
(3) 動物飼育活動後も動物と子どもの関係がとぎれない活動の工夫 |
|---|

*上越市立明治小学校

2 研究の方法

- (1) 対象児童 農村地域にある小規模校（全校児童86名，各学年1学級），1年生14名
- (2) 飼育動物 ヒツジ（1頭）
- (3) 活動期間 飼育期間：平成16年6月7日～12月14日
飼育終了後の受け入れ先への訪問期間：平成16年12月21日～平成17年9月12日
- (4) 研究の視点の具体化

① 出会いやかかわり合いを密にするような場の設定

生活科の最も大きな特質は，子どもが自分とのかかわりの中で，身近な人々，社会及び自然に直接働きかける活動をめぐって展開することである⁵⁾。子どもたちが自ら働きかけるような環境作りは，活動を展開する上で重要なことであると考えている。印象に残る出会いや自分たちが楽しんで行ったことなどは子どもたちにとって忘れられないものである。自分で決めて行動をすれば思い入れも強くなり，責任感も生まれ，動物を身近な存在として感じるようになる。また，様々な人の支えがあって，動物飼育ができることにも気付いて欲しい。

② 子どもたちの話し合いを重視し，子どもの願いや思いを具現化する活動の工夫

自分で考え，みんなの意見を聞くことは話し合いの基本である。さまざまな意見を知ることで，自分の考えが広がり，共同で活動する意義を一層深める。継続的に世話を続けることで，子どもと動物との関係が深くなり，子どもたちが「やってみたい」「こんなことをしたらどうかな」と自分の願いや思いが芽生えるだろう。その思いや願いが具体的になり，実際に行われることで，動物へのかかわり方も変化すると考える。さらに，お互いの願いを出し合うことで，「自己」と「他者（動物や仲間）」との違いに気付き，自分を認め他者も認める力が育まれるだろう。子どもの願いや思いに対応した活動の工夫をすることで，子どもたちのよさを引き出すことができると考えた。子どもたちの願いや思いを見取ることができるように，考えていることや分かったことなどは，全員が理解しやすいように模造紙に書き，いつでも確認できるようにする。また，活動後や話し合い後は作文を書き，自己の振り返りの場とする。

③ 動物飼育活動後も動物と子どもの関係がとぎれない活動の工夫

飼育活動は1，2学期を予定しているが，飼育活動が終わっても，子どもの動物への思いがなくなるわけではない。飼育が終了して活動を閉じるのではなく，飼育活動後も動物との関係がとぎれないようにする。自分たちと別れ，他の動物たちと一緒に成長している動物を見たり，関連した活動をしたりすることで，動物への愛情や理解がより一層深まるのではないかと考える。

(5) 考察の方法

本研究は上記の視点を基に，中型動物のヒツジの飼育を通して，子どもたちが活動する様子の観察，話し合いの記録，活動後の作文から，子どもたちの変容を考察する。

(6) 主な活動の経緯

月日	活動の流れ	場の設定・活動の工夫	子どもの姿・願い
5/15	地域の家畜農家への訪問	・家畜農家の方との事前の打ち合わせ。様々な動物とふれあいの確保	・かわいい動物がたくさんいるね。ヤギやヒツジ，ウサギの赤ちゃんをさわったよ。
5/20	家畜農家への2度目の訪問	・家畜農家の方から子どもたちへヒツジの話をしてもらう。	・また遊びに行けてうれしいな。ヒツジさんは独りぼっちなんだ。かわいそうだな。お世話したいな。
6/4	保護者との小屋作り	・子どもの手紙で保護者への協力の呼びかけ。事前に保護者の代表と小屋作りの打ち合わせ	・お家の人に小屋作りを手伝ってもらいたい。お願いしよう。
6/7	ヒツジの迎え入れ	・迎える会の準備。保護者へ知らせる。	・プレゼントを作ろう。ヒツジさんかわいいな。
6/16	祖父母との柵のペンキ塗り	・祖父母参観を利用して共同作業の計画。ヒツジ飼育への抱負を発表する場面の設定	・おじいちゃんと一緒にペンキ塗り楽しいな。お世話をがんばるよ。掃除も忘れないよ。
7/14	音読集会でヒツジの「あいうえおのうた」を発表	・国語の単元「あいうえおのうた」を取り入れる。ヒツジと一緒に音読発表をする。	・メープルのうたを考えたよ。メープル喜んでくれるかな。大きな声で発表できたよ。
7/22	ヒツジのシャンプー	・ヒツジの夏の過ごし方について話題提供	・メープル暑そうだな。気持ちよさそう。
夏休み	子どもが保護者と一緒に来て，1日一人の当番制で朝・夕の世話	・事前に保護者の方と話し合いをもち，協力の依頼をした。当番表や観察日記の作成	・暑かったけどお世話を頑張ったよ。餌をたくさんもってきたよ。お母さんと一緒に散歩させたよ。
9/10	動物ランド・ぶどう園への校外学習	・動物ランド，ぶどう園との交渉。2年生や特殊学級の子どもたちと一緒に行く。子どもたちに留守の時にヒツジをどうするか問いかける。	・僕たちがいないから，メープルをどうしよう。連れて行きたいな。メープルを動物ランドのヒツジに会わせたいな。メープルうれしそう。
10/12	地域の保育園へ訪問 保育園児へヒツジを紹介する。	・国語の単元「大きなかぶ」の学習成果を地域の保育園へ発表する活動を計画。子どもたちが電話で保育園へ連絡し交渉するようになった。	・メープルを保育園の友達へ知らせたいね。うんちを掃除するほうきを持って行こう。保育園の友達が喜んでくれてうれしかったよ。

10/29	地域の公園への散歩	・2年生や特殊学級の子どもたちと一緒に行く。	・一緒に散歩は楽しいね。
11/25	動物ランドから婿入りについての手紙をもらう。お婿に出すかどうかの話し合い（11/30婿に出すことに決定）	・数度にわたって子ども同士の話し合いの設定 学年便りで保護者へ話し合いの経過を連絡 ・婿入りに向けての準備。子どもの「してみたいこと」ができるように時数の確保	・これからも一緒にいたい。別れるのが寂しい。他のヒツジと仲良くやっていけるか心配だ。お嫁さんをもらって赤ちゃんを産んで欲しい。メープルも家族をもって欲しい。お婿に出そう。
12/14	婿入り（お別れ会）	・お別れ会当日、動物ランドの人と一緒にメスのヒツジ（お嫁さん）が迎えにくる。音楽の学習と関連させて「メープルのうた」を作る。	・お別れまでいっぱい遊びたいな。お世話もするよ。 ・お嫁さん、よろしくね。やっぱりさみしいなあ。元気でね。動物ランドのみなさん、お願いします。
12/21	ヒツジの様子を見に動物ランド訪問	・事前にヒツジについて想起させる場の設定	・元気でいるかな。仲良くしているかな。
2/15	算数「大きなかず」導入場面でメープルを登場させる。	・デジタルコンテンツを用い、たくさんのメープルをテレビ画面に映し出し、動機付けをした。	・メープルがいっぱいいる。何頭いるんだろう。おもしろそうだな。
3/11	雪遊びをかねて動物ランド訪問	・体育・生活科の他単元（雪遊び）と関連させて活動を計画する。	・1年生の終わりにメープルに会いたい。メープル、元気だった？お嫁さんと仲良くしているね。
5/26	新1年生と一緒に動物ランド訪問	・新1年生と一緒に行き、メープルを紹介する場の設定	・大きくなっている！早く赤ちゃんが見たいね。僕たちももっと大きくならなくちゃね。
9/12	4度目の訪問	・事前に子どもたちへヒツジがどんな生活をしているか想起させる。	・とっっても大きくなっている。すっかり動物ランドの仲間だね。ほっとしたよ。

3 実践内容（抜粋）

(1) 出合いやかかわり合いを密にするような場の設定

① 迎え入れるまでの活動を重視する

ア 地域の特性を生かす

自分たちで世話をしたい動物を決めることにより、楽しみや期待が膨らみ、責任をもって飼育をしようという気持ちになると考えた。そこで、地域の家畜農家に動物の提供や訪問について相談すると快く引き受けてくださり、子どもたちが飼育活動に関心もてるような交流の場を家畜農家の方と作ることができた。

ヒツジを飼育することはまだ決定せず、春探しの一環として地域の家畜農家を訪問した。ウシやヒツジ、ニワトリなどたくさんの動物とふれあい、また動物と遊びたいという気持ちをもつことができた。そこで、再び家畜農家へ訪問した。繰り返し訪問することで、農家の方とも親しくなり、動物の様子も分かるようになる。子どもたちはそこに親がいない小羊が一頭いることに気付き、なんとかしてあげたいという気持ちが芽生えてきた。その思いから、ヒツジの飼育活動を始めた。地域の家畜農家の方の協力を得たことで、出合いを大切にすることができた。

イ 保護者の協力

飼い始めるには小屋やえさの用意などさまざまなことを準備したり、世話の仕方を知ったりしなければならない。子どもたちの力だけでできないことも必ず出てくる。保護者の方から小屋作りなどの協力を得ることで、子どもたちも周囲の人から支えてもらって活動ができることに気付いて欲しいと考えた。

当校でヒツジを飼うのは初めてだったので、小屋の準備を含め一から始めた。子どもが飼い方を調べたところ、柵が必要だということになり、みんなで杭打ちに挑戦した。しかし、実際にやってみると杭を地面に立てることは無理だった。子どもたちは悩んだ末に家の人に協力してもらいたいと言いつつ出した。そこで、一人一人が家の人へお願いの手紙を書き手伝ってもらうことにした。子どもたちも手伝いながら、家の人の手により立派な小屋ができあがると子どもたちははとてもうれしそう、何度も家の人にありがとうと言う子がいた。小屋の完成で早くヒツジが来て欲しいという気持ちが高まった。また、保護者の方に協力を得たことで、ヒツジに対して保護者の方からも関心をもってもらうことができた。

② 継続的なかかわり(以下、活動の様子が伝わるようにヒツジをヒツジの名前の「メープル」として記述する)

毎日の世話（えさやり、小屋の掃除など）を継続的に行うこと、つまり毎日接することは活動の基本である。当校は1年生が14名ということもあり、当番制にしている世話当番も頻繁にまわる。休日の当番も入れると回数がさらに増える。休み時間や朝にメープルと触れ合うので、ほぼ全員が毎日確実にメープルとかかわる。中には、メープルに対して関心をもたない子もいるが、世話や触れ合いを重ねるとメープルにも慣れ、メープルの様子の変化などに気付き始める。

その日の世話当番は、帰りの会で「今日のメープル」として、メープルの様子や掃除などについて毎日報告会を開き、メープルとのかかわりがとぎれないように心がけた。

③ 他教科との関連（国語、算数、音楽、図工）

- ア 国語 「全校音読集会」での詩の音読発表。みんなでメープルの「あいうえおのうた」を作って発表した。
- イ 算数 「おおきなかず」の導入場面で、子どもたちの意欲づけに、デジタルコンテンツを用いてたくさん数のメープルをテレビ画面に映し出した。
- ウ 音楽 文化祭で、メープルを登場人物に入れたオペレッタを発表した。お別れ会の時に歌を作成した。
- エ 図工 メープルの絵を描いたり、メープルのバッチやパズルを作ったりした。

(2) 子どもたちの話し合いを重視し、子どもの願いや思いを具現化する活動の工夫

① 一人の気づきを全体に広げる話し合い

ある暑い日に、一人の子どもから「メープルはあんなに毛があつて暑くないのかな」「とっても暑そうだから、シャンプーをしてあげたい」という提案があった。「メープルが嫌がるようだったらやめようね」「しっかりと押さえないと、メープルの顔に水がかかってしまうね」などと、相談しながらシャンプーにチャレンジした。メープルは気持ちよかったのか、子どもたちが体を洗うのを嫌がることもなく受け入れていた。

7月22日 メープルにシャンプーをしたよ。「めーつ」てなかなかつたよ。きつと、かゆかつたのがきえたんだよ。うれしかつたよ。よかつたよ。メープルはきれいになつたよ。さいしょみずをかけたら けがたおれたよ。おもしろかつたよ。 M子

ここでメープルについて一つ発見することもできた。シャンプーすると毛がどんどん倒れ、ヒツジ本来の体型が表れてきた。子どもからは「(メープルが)大きくなったと思ったけど、まだこんなに小さいんだね」と、驚きの声が上がった。たくさん毛が体を覆っていたことが分かった瞬間である。

② 他の教育活動をかかわらせた活動を広げる話し合い

ア 動物ランドとぶどう園へ

2年生と一緒に動物ランドとぶどう園へ校外学習で出かけるとき、一日学校を留守にするのでメープルをどうしようかと話し合いになった。「えさと水をたくさん入れておけばいい」「他の学年の人や先生にお願いをする」などの意見の中、「メープルの仲間に会わせたい」「僕たちが楽しみな校外学習にメープルも一緒に連れて行きたい」という願いが出てきた。動物ランドにはメープルと同じヒツジがいる。自分たちが親・兄弟となって世話をしているが、一頭で小屋にいるので、ヒツジの仲間に会わせたいということだった。メープルと一緒に連れて行くときに「行った先の人に迷惑をかけないように、うんちを片づけるちりとりとほうきを持って行こう」と言い、準備をする子どもたちの姿があった。

動物ランドへ着き、早速そこにいるヒツジたちにメープルを会わせると、メープルはヒツジたちに近づいていった。メープルは日頃は他のヒツジと関わることなく暮らしているが、仲間を認識し、近づく姿を見て驚き、子どもたちは「メープルは分かっているんだね。うれしそうだね」と感心していた。

イ 校区の保育園へ

この活動後に、国語の「おおきなかぶ」の学習発表を、卒園した保育園のみんなに見てもらうことになった。そこでも、「メープルを保育園のみんなに紹介したい」という声があった。保育園へ行く前に右記のように話し合いがまとまった。

- 小さな子どもへも分かるように優しく、はっきり話すこと
- メープルを保育園の子どもたちが触るときには必ず自分たちがついていること
- メープルが嫌がること、好きなえさのことなどを保育園の子どもたちへ知らせること

保育園では、園児がメープルに触るときは、子どもたちが必ず近くにいる、「この草はメープルは好きだよ」「首輪を無理に引っ張らないでね」と優しく話しかけていた。お兄さん、お姉さんとしての自覚と、メープルは自分たちが大切に世話をしているという責任感が感じられた。活動後には、ヒツジを見に、学校へ遊びに来る保育園児の姿があった。

その後、公園へも一緒に行くことがあった。繰り返し学校外へヒツジを連れて行くことで、子どもたちは周囲へ配慮することに気づき、そして、たくさんの人たちへメープルを紹介したいという強い願いが膨らんできたのだと考える。

③ 自己決定、仲間理解のための話し合い

動物ランドへメープルと一緒に連れて行ったことから、動物ランドの方からメープルをお婚に欲しいという話をいただいた。動物ランドには雌ヒツジしかおらず、子どもを作るために雄が欲しいということだった。動物ランドからその旨の手紙を書いてもらい、子どもたちに読み聞かせた。子どもたちは非常に驚き、最初は寂しいと全員が反対した。

11月25日 どうぶつランドからメープルをおむこにほしいとてがみがきました。びっくりして、かなしかったよ。メスがくればいい。こやが小さいときはかべをつくってやねをつけられたいとおもいます。メープルがおとうさんになるのはいいけど、わかれるのはいやです。すごくふくざつです。
I男

学校で世話をし続けるには、冬の過ごし方についても考えなければならなかった。子どもたちの話し合いは何度も行われ、その様子を学年便りで保護者にも伝えた。子どもたちは家に帰っても家の人と話し合っていた。

A男の家ではメープルの今後について家族会議を開いていた。A男はメープルをとてかわいがっており、家でもよくメープルの話をした。A男はメープルを婿に出すことに反対であったが、家の人から動物ランドの人の願いや、メープルにとってどちらがいいのかという話を聞き、少しずつ考えが揺らいできたようだった。学校での話し合いでもそのことをみんなに話した。ほかの子どもも、家で相談したり友達の考えを聞いたりし、メープルにとって何が一番いいのかを考え始めた。自分よりもヒツジの気持ちを考え出していた。

11月30日 メープルといっしょにいたいけど、メープルはおむこにいったほうが良いとおもったよ。あたまでは、いったほうが良いとおもうけど、やっぱりさみしいです。でもメープルはおむこにいったほうが良いです。赤ちゃんがうまれたらみにいきたいです。
M男

話し合いの末、全員でメープルをお婿に出すことに決めた。子どもたちは、メープルの気持ちを考えて決定した。子どもたちは、寂しい気持ちをもちながらもメープルがお父さんになることへの期待をもつようになった。

メープルとのお別れが決まり、お別れまでの残りの時間どんなことをしたいか話し合った。

～メープルと やりたいこと～
○しゃしんをとる ○さんぽ、かけっこ、あそび ○メープルとのおもいでのものをつくる
○えさをたくさんあげたい ○ぜんこうのみんなやほいくえん、おぎたにさん(家畜農家の方)にしらせる ○どうぶつランドの人へメープルのしょうかいのぶんをかく

自分たちのしたいことはもちろんだが、えさをあげたい、動物ランドの人へ手紙を書くなど、メープルを気遣い、メープルにとって大切なことをしたい気持ちが感じられた。また、これまでにかかわった人々に知らせたい気持ちがあり、様々な人とかかわりの中でメープルの世話をしてきたことを実感していたと考える。

(3) 動物飼育活動後も動物と子どもの関係がとぎれない活動の工夫

当校はスクールバスがあり、校外学習へ出かけるときに利用することができる。その利便性を生かして、メープルが婿に行った翌週、メープルの様子を見るために動物ランドへ行った。子どもたちはすぐにメープルの所へ駆け寄り、うれしそうになでていた。「メープルって呼んだら来てくれたよ」「お嫁さんと一緒にいたから安心したよ」と、自分たちのことを覚えてくれた喜びと、お嫁さんと幸せそうに過ごしていることに安心したようだ。3学期になっても、子どもたちはメープルのことを気にかけて、「寒くないかな」「赤ちゃんはできたかな」と心配し、また会いに行きたいと口にするようになった。そこで、3月に雪遊びをかねてメープルに会いに行った。動物ランドの方はとても親切で除雪をし、子どもたちが見やすいように準備をしてくれていた。2年生になっても2度動物ランドへ訪問した。動物ランドへ着くと子どもたちは必ず1番にメープルに会いに行った。

12月21日 どうぶつランドにいきました。およめさんはメープルをきにいつてくれたかな。まだ、ちょっとメープルがいなくなつてさみしいです。でも、またあいにいきたいです。メープルは、動物ランドのなかまたちとなかよくしてくれればいいな。きょうは、いってよかったです。
Y子

3月11日 メープルにあいにいきました。ついたら、ランドのおじさんがまわってくれました。メープルのふわふわしたおなかをさわると、まえのメープルのことをよくおもいだします。メープルのたいけいもすごくかわつて大きかったです。メープルとあえてすごくよかったです。
R男

4 成果および考察

学習指導要領の改訂の「2生活科改訂の趣旨(1)改善の基本方針」には、「各学校において、地域の環境や児童の実態に応じて創意工夫を生かした教育活動や、重点的・弾力的な指導が一層活発に展開できるようにすること」とある。本研究は、3つの視点に着目して活動を展開したが、展開するにあたり各学校の特色を生かすことが子どもの学びの充実を生み出すのだと実感した。また、学校生活の中で、子どもたちはメープルとのかかわりを通して学校を知り、他学年との関係が広がっていった。そして子どもたちがメープルを育てるという目標に向かうことで、主体的に活動すると同時に学級の団結も強まっていった。学級経営においても一つの目標に向かう活動は、子ども同士、子どもと教師の信頼関係を築くために有効であると感じた。

(1) 出合いやかかわり合いを密にするような場の設定

「今日はメープルどうしているかな」「会えるのが楽しみだな」と子どもがメープルを大切なものにとらえるよう

に支援することが大切だと考える。出会うまでの準備を大切に、地域、保護者の方の協力により子どもたちは支え励まされ、安心して新しいことに挑戦することができた。子どもたちの学びの質は、場所などの物的な環境はもとより、様々な人とかがわり合う場面を積み重ねることで変化していった。「どうすればいいの?」「教えてほしい」というような受け身的な発言や行動から、「メープルのために〇〇さんに聞いてみよう」などと問題解決にむけて積極的に行動するようになった。また、毎日の世話活動を中心とし、他教科や行事など様々な場面でメープルを取り上げることで、なかなか興味をもたなかった子ども、メープルを仲間として受け入れる姿があった。様々な学習にメープルを効果的に取り入れることで学習内容そのものにも興味をもち、メープルの存在をより身近なものと感じられるようになった。それにより、子どもたちに優しさや思いやりの気持ちが育ってきた。

(2) 子どもたちの話し合いを重視し、子どもの願いや思いを具現化する活動の工夫

子どもの願いを具現化するため、話し合いの積み重ねは重要であった。お互いの意見を出し合ううちに、自然とメープルのためにはどうすればいいのかという流れになった。子ども一人一人のつぶやきを学級の話題として取り上げるなどして問題意識を共有し、明確にしたことで、自分中心の意見をもっていた子ども、問題解決のために友達の意見も聞くようになった。それはメープルのことを考えて活動をする大切さに気付くきっかけとなっていった。子どもたちの気持ちの変化を子どもたち自身が感じ取るためにも、話し合い記を記録に残して振り返ったり自分の考えを作文などでまとめたりすることが、自己理解、他者理解につながったと考える。

指導計画のもと学習は進められるが、その場の状況や子どもたちに合わせた柔軟で継続的な活動により子どもたち自身が主体的に考え、相談する姿を生み出すことを実感した。メープルと校外へ出かけるときは子どもたちが寄り添ったり、道を先導したり、糞の始末をしたりと、一人一人が自分の役割を見つけていた。メープルを自分たちの仲間として自分たちのしてみたいことの対象から、メープルのためにしてあげたいことというように願いが変化してきた。また、飼育活動を通して地域や社会とのかかわりが生まれた。活動を重ねると、子どもたちが発見したり考えたり感動したりというような知的な気付きが生まれ、それが次の活動への意欲につながった。

(3) 動物飼育活動後も動物と子どもの関係がとぎれない活動の工夫

動物ランドへの訪問で、動物ランドの方がメープルを熱心に世話する様子を見ることができた。子どもたちは、動物ランドのヒツジに会いに行きながら、子どもたちを取り巻く人々や社会が、自分たちとも深くかかわっていることへの気付きが生まれた。学校以外の社会とのつながりを学ぶことができ、子どもたちにとって有益な活動であった。

5 おわりに

生活科での動物飼育活動では(1)から(3)の視点を教師が常にもち、子どもたちを支援していくことが、教育活動を深め広げていくために有効であると考えた。また、2学年を通して単元構成することで、子どもたちの視点に立った継続的な活動を組むことができ、子どもの学びの質の深まりをみることができた。今後の課題は、より子どもの実態を生かした2学年を通しての指導計画の立案である。また、子どものより主体的に学ぶ姿を育むために、子ども自身が自分の学びを振り返ることのできる自己評価の方法を探ることである。

^{脚1)} 以前、1年生(58名)を対象にヤギ2頭の飼育活動を実践した。継続的な飼育活動を通し、動物に対する愛情が芽生え、命の大切さを感じる子どもの姿を見ることができた。しかし、飼育開始すぐに1頭が死亡し、1頭のヤギを飼育することになり、ヤギにかかわる体験そのものが十分にできなかった子どももいた。ヤギに関心をもち世話を続けた子どももいたが、残念ながらヤギとの関係が十分に築けず関心ある子に合わせて活動する子どもも見られ、反省が残った。

参考文献

- 1) 木村吉彦, 「生活科・総合的な学習の存在意義」, 日本生活科・総合的学習教育学会誌『せいかつか&そうごう第12号』, 2005, P.36
- 2) 野島聡子, 「生活科における飼育動物の学習材としての有効性に関する一考察」, 教育実践研究第15集, 上越教育大学学校教育総合研究センター, 2005
- 3) 佐野隆弘, 「動物との触れ合いやかかわり合いを通して学びを深める学習を目指して」, 教育実践研究第8集, 上越教育大学学校教育研究センター, 1998
- 4) 新潟県上越市立高志小学校「超研究開発 脱ピラミッド」, 2002, pp.89-93.
- 5) 嶋野道弘, 「子どもはどのようにして生き生きと活動するのか」, 初等教育資料No.781, 2004, pp.48-59.
- 6) 木村吉彦, 「生活科の新生を求めて」日本文教出版株式会社, 2003, pp.12-15.